

送別の「砂漠」

—渤海使贈答詩群にみる東アジア漢字文化—

文化科学研究科・日本文学研究専攻 七田 麻美子

送別の「砂漠」

—渤海使贈答詩群にみる東アジア漢字文化—

文化科学研究科・日本文学研究専攻 七田 麻美子

平安時代の東アジア外交における重要な交流手段に漢詩文の応酬が挙げられる。

例えば奈良時代の詩集『懐風藻』に見られる、「新羅客」との漢詩の応酬などもその例である。平安時代の外交においては、唐との国交を担った遣唐使以上に盛んに交流が行われていた、渤海使との交流においてもそれは見られる。

渤海使の派遣については、その政治的な性格から前期と後期に分けられ、後期の文治的な外交の先鋒にあったのが菅原道真と、渤海大使裴頴（第三十回 元慶六年（八八二））との交流である。文人官僚裴頴の高名は、その来朝以前から知られていたらしく、その応対に急遽道真を治部大輔に任命した。これは道真の文才を以て国家を代表させたいという意図からである。その期待に応え、道真と裴頴の文人としての交流が厚く結ばれていった様子は、『菅家文藻』巻二収録の一連の渤海使贈答詩群から伺える。

渤海人裴頴と道真が贈答したのは、双方にとって外国語である漢語を用いた詩である。使節の歓迎や送別等、一連の儀礼の後に開かれる宴席で必ず披露されるなど、漢詩の応酬は重要な交流であった。当然このとき作られる詩文は、相手に理解され、受け入れられるものでなくてはならない。詩文の内容が相手に伝わらなくては意味を成さない場において、外国語で文学を為すという高度な技術は、もちろん個人の資質によるところも大きいですが、それ以前に文学の性格上、すでに確立されていたともいえる。

一般に漢詩文の作成においては、先例を持つ語、明らかに典拠を踏まえた語を使用するのが当時の決まりごとであった。例えば、杜甫や李白などの詩語に、ほとんど典拠があるという指摘があるように、漢語の本国である中国においても同じことである。だが漢語を母語としない国々では、外国語で文学を為すという点において、一層切実に必要な態度であった。

こうして、渤海と日本の文人は中国の古典作品をベースにした文学の応酬をすることになる。お互いが共通の「常識」として持ち合わせた語彙を以て、気持ちを伝え合うのである。

『菅家文藻』巻二所載の裴頴に送られた詩「過大使房、賦雨後熱」（「大使の房を過ぎりて、雨の後熱しを賦す」）には以下のような一節が有る。

寒沙莫趁家千里 寒沙趁ふこと莫れ 家千里
淡水當添酒十分 淡水當に添ふべし 酒十分

ここにある「寒沙」は寒い砂漠という意味になり、ここでは渤海の地を指す。夏のうだるような暑さの中、「あなたの故郷の寒い砂漠に思いを馳せるのはおやめください、いまこの場所にも涼しい場所がございます、酒を酌み交わしましょう」といった意味である。北方の渤海を「寒」とするのは妥当としても、現在の中国東北部等に位置し、当時から肥沃な土地に恵まれた国家である渤海を「沙」とするのは、現実には合わない表現である。道真は渤海に赴いたことはないが、この表現を用いたのは無知のせいではない。当時送別の詩は砂漠を描くものだという、一つの常識があったからである。

平安朝の日本の文人たちがもっとも好んだ作家に白居易が挙げられるように、日本文学における唐詩の影響は大きい。その唐代の詩文において、西方の砂漠の関を抜ける人々への送別詩が、大きなジャン

ルとして存在する。送別＝砂漠へ行くこと、という一つの概念があるのである。事実「寒沙」は白居易詩などにも多く見られる。征討詩ともよばれる一連の詩を共通の知識として持っている裴頴には、この語の意味は誤解なく理解できたであろう。

こうした、中国古典作品という共通の常識に立った文学の存在は、一方で東アジア漢字文化圏といわれるものを想起させるものではある。ただし、その詩語等の選別には地域性も見られ、中国文学の享受のあり方から、各国の文化的または政治的経済的な特色を読み取る必要もある。いずれにせよ、中国文化の影響下にあった日本文化という視点の、正しい認識を以てしなくては、日本文化の特質も理解には至らないといえるだろう。